

社会的協働のコミュニケーション

——アントニオ・ネグリへの〈大都市〉についてのインタビュー——

アントニオ・ネグリ*、フェデリーコ・トマゼッロ**

(北川真也*** 訳)

Federico TOMASELLO

La Comune della cooperazione sociale. Intervista ad Antonio Negri sulla metropoli.

<http://www.euronomade.info/?p=2185>, Apr 25, 2014

フェデリーコ・トマゼッロ

いまや数年前のことですが、このインタビューの対象である〈大都市〉metropoliについて、君がこれまでに書いた文章が、一冊の本に所収されました。そのタイトルは、『工場から大都市へ』です^{註1}が、これはある格言へと言及するものでしたね。それによれば、工場が労働者階級に対して存在したように、〈大都市〉はマルチチュードに対して存在する、というわけです。

今日、君と話したいと思っているのは、以下のことです。昨今起こっている一連の変容、運動、地球規模の危機は、〈大都市〉分析に対して何を告げているのでしょうか。〈大都市〉分析とは、それを通して、現在を解説する数多くのカテゴリーを再読し、再解釈させてくれる分析の格子として理解されるものです。

最近——とりわけ、「ヨーロッパにおいてマルチチュードの同盟を構築するために」^{註2}という発言のなかで——、君は、ポスト・オペライズモ^{註3}の経験によって強化されてきたいくつかのカテゴリーを、批判的に検討する必要性を指摘しました^{註4}。そこで、何よりもまず、〈大都市〉とマルチチュードの関係というこの解説図式も、検討され、時代に即応させなければならないと考えているのかどうかたずねてみたいと思います。

アントニオ・ネグリ

〈大都市〉について言えば、こんにち、私たちはまったくオープンな状況に対峙していると言えます。それゆえ、この言説には検討を加える必要があると思います。とはいえ、いずれにしても、私は〈大都市-工場〉という主題を強調するつもりです。明らかですが、〈大都市〉は工場とは根源的に異なるものです。〈大都市〉は、そのいつさいの固有性において

分析されなければならない生産のひとつの場所です。けれども、〈大都市〉が、ほかならぬ最上の生産の場所であることもまた事実なのです。

二つ目ですが、都市住民の全体、都市のマルチチュード、〈大都市〉のマルチチュードは、工場における労働者階級のように考えられるべきなのでしょう。ここでもまた明らかですが、この言説は拡大され、単純化されて、当初のカテゴリーからは遠ざけられたものです。しかし、〈大都市〉がこんにちマルチチュードにとって、工場がかつて労働者階級にとってそうであつたところのものであると断言することは、比喩などではありません。この点が強調されなければなりません。たとえ工場との関係におけるような、単純に搾取のそれではもはやないとしても、そこにひとつの関係が存在する、生じているからこそ、それは比喩ではないのです。

私は、以下のような社会学者たちによってかなり仰天させられています。かれらはこんにち、「空間性」の物神の背後に身を隠しながら、様々な差異と分離の刻印のなかでのみ、〈大都市〉を通り抜けてしまっています。反対にそこには、この多様性の背後に、まったく堅固なやり方で作用している、「採掘メカニズム」^{註5}と呼ばれる搾取のメカニズムが存在しているのです。もし私たちが〈工場-大都市〉、〈階級-マルチチュード〉という軌道を採用するならば、比喩的ではない状況に対峙することになるでしょう。しかし、その状況は、搾取についての新たなカテゴリーを磨いて、解釈しなければならないものです。そのカテゴリーというのは、とりわけ、採掘、採掘的搾取、よりうまく言うならば、採掘による支配関係とこんにち呼ばれている搾取に関するものです。

採掘主義の主題は、強く主張されなければなりません。ただし、〈大都市〉の社会的テクスチュアが、

* 政治思想家

** フィレンツェ大学

*** 三重大学

工場と同一視のできないものであることを忘れることなしにですね。同一視できない第一の理由は、〔〈大都市〉では〕分業がただちに機能的ではないですし、規律訓練的でもない。ましてや制御的でさえないからです。第二の理由は、私たちが資本主義的搾取の異なった局面に身を置いているからです。それというのは、カルロ・ヴェルチェッローネによって——認知資本と認知労働のあいだの関係について言えば——すでにもうポスト工業的ではなく、紛れもなく情報科学的と呼ばれている局面です。いまやこの局面は、おのれの均衡を見出しはじめているわけですが、そこにおいて搾取関係は、定義を与えるのがかなり難しいものとなります。というのは、この領域においては、固定資本と生きた労働の混同、異種混淆、ことによると、主体それ自身による固定資本の領有^{訳注6}という事態が確実に存在しているから、それゆえに、自律性を有する装置としておそらくはみなされねばならない社会的協働の毛状体が存在しているからにほかなりません。

トマゼット

君は採掘メカニズムについて語ってくれましたね。そこから、協働というテーマ、それから自律性というテーマに言及するに至りました。その軌道は、〈大都市〉概念の構造的に両義的な効果や意味を参照させるもの、問題の二面性をいつも参照させるものだと思います。

それは一方で、社会的制御の新しいレジーム、社会的に生産された価値を捕獲するメカニズム、労働力と都市における社会的協働の徹底した収奪、レント、不動産投機、〈大都市〉空間の内部においてフロンティアが多数化している事態を参照させるものであるわけです。しかし他方では、——『コモンウェルス』^{訳注7}を引用しましょう——「マルチチュードの非有機的身体」、数々の主体性と生の形式が生産される領域、未曾有の主体形成プロセスをもたらす独自の空間性、あるいは君の言葉で言うなら、「コモンcomuneを生み出す諸情念全体を集中させる制度的ミルフィーユ」としての〈大都市〉があるわけです。

〈大都市〉という観念の有するこれら二つの側面のあいだの相互関係は、どのように提示され、分析されなければならないと考えますか？ 相互の相対的自律性に関する諸要素を強調する仕事をせねばならないのでしょうか？ それとも、双方のたえざる相互作用を明らかにしなければならぬのでしょうか？ つまるところ、コモンの構築という観点からみたとときに、〈大都市〉のテクスチュアを調査する仕

事にとって、基本的な座標となるのはどちらでしょうか？

ネグリ

思うに、〈大都市〉の経済は、根本においてひとつのものです。自律性の要素と採掘的搾取の要素。もちろん双方が、それらに固有の実質性のなかで、それらの強度のなかで考察されなければなりません。しかし、両者の相互関係の中心性こそが、引き受けられなければならないのだと思います。このようにして、私たちは〈大都市〉の比喩的ではない仮定に戻ることになるわけですね。工場がかつて労働者階級に対してあったように、〈大都市〉はマルチチュードに対してあると。なぜなら、資本という概念は、いつも二重の概念だからです。搾取する人と搾取される人がいる。指令をくだす人と抵抗する人がいるのです。

とするなら、問題は、ゲームのなかにいる主体の内包的な定義を、主体を二者択一的にたえず再定義する次元、つまりは、関係という次元——私は君を定義する。君は私を定義する。こうして無限に続くわけです——へと結びつけることにあるわけです。このゲームのなかでこそ、主体の質——そこから引きだされねばならない人類学的発展とともに——と諸力の強度が規定されるのです。私たちは、この関係を考察できなければなりません。まるで衝突しあう二つの大きな塊であるかのように、数々の波、そして波の跳ね返りからなる流動的ですが、極めて強固なテクスチュアとしてのこの関係を。

さて明らかですが、現実的でもあるこの水準から「ミクロな」分析へと移動するのはややこしい仕事です。ただ「ミクロな」領域に達することができてのみ、社会学——たとえ対象＝客体への物神崇拜ではなく、動態的な要素としての主体の定義を採用するマルクス流の社会学であっても——から、情念を作用させる物理学としての政治学へと歩むことができるのです。これは真の「アルクアーティ主義」^{訳注8}です。平凡な〈コンリチェルカ〉conricercaが重要なものではありません。大切なのは、研究を、集合的情念の構築をめぐる作用する機械として定義する力量、機能させる力量なのです（これは少しばかり、マキャヴェッリ、スピノザ、ご存知のマルクスのなかで、こんにちではフーコー、あるいは異なった流儀ですが、『千のプラトー』のドゥルーズ＝ガタリの試みのなかに見出されるメソッドです。しかし、ドゥルーズ＝ガタリの試みは、一方では現実からの過度な抽象化という限界、他方では階級的現実への配慮が乏

しいという限界を有してはいますが)。

トマゼット

君は、諸々の「人類学的発展」について指摘しました。それらは、〈大都市〉テクスチュアの変動と蓄積過程の分析から引きだされなければならないものだと思います。その次に、思考と研究を、現在へと介入する手だてとしてくれるメソッドをめぐる領域へとたどりつきましたね。

さて、ここでたずねてみたいのです。現代の〈大都市〉のなかに、政治的なものの新しい人類学的次元が示唆される諸条件を追跡することが可能だと考えますか？ またどのような姿勢を通して、それらは調査されねばならないと思いますか？

ネグリ

人類学的なモチーフもまた、二つの側面から理解されなければなりません。一方には、「ポスト工業的人類学」の精神形態、すなわち、主体による「固定資本」の再取得と私たちが呼ぼうとしている問いがあります。つまり、人間が、この機械の一部をおのれのものとして領有するという、そして機械への独占的な指令を、資本から取り去るということです。

ここで考慮すべき重要な要素は、以下です。それは、資本主義的指令によってなされている操作が、テクノロジー的諸要素を人間身体内部へと単純に注入するだけではもはやないということです。そうではなしに今となっては、それと同じく重要なやり方で、資本主義的指令は、機械状諸要素^{註9}を再領有する力量、自律的に変容させる力量、これら人間構造の内にある力量と関わるようになっていくのです。

こんにち、「社会的情念」について論じられるときには、テクノロジーの受動的消費、特には能動的消費と結合した情念について論じられなければならないのだと思います。このテーマは——工業労働者の場合においてそうでなければならなかったように——純粋な人間、剥き出しの人間をめぐる道徳論とたわごとからは引き離されなければなりません。人間が純粋だったことは一度もないし、労働者が裸身だったことは一度もないのです——これらの人びとはいつも服を着ているし、よごれてもいるのです。それどころか、かれらが服を着て、行動する様式こそが、かれらの現実を唯一、私たちに提供してくれるものにほかならないのです。

このことは、欲求と貧困の地平を定義するうえでも有益なものでしょう。明らかですが、こんにちの

貧困は、一世紀前のそれとは完全に異なります。つまりこんにちにおいて貧困が論じられるときは、むしろコミュニケーション手段、協働の水準に社会的に統合される能力へと言及されるわけです。これは当然ながら、貧困を栄養と住居の観点からのみは定義しないということです。

それから他方において、〈大都市〉における豊かな人類学的実体が把握されなければなりません。それは、そこにおいて主体の自律性が全面的に展開される水準、つまり一般的あるいは増殖的で、広く共通に見出せる諸傾向、諸々の振る舞いと結びついた水準としての人類学的実体です。この(受動的または能動的)共通性の要素は、基本的に〈大都市〉において与えられるものであり、あらかじめ研究によって把握されなければならないものでしょう。さらに、中心と周辺のあいだの無数の差異、特異性の無数の水準、いまや都市のプランニングとプログラミングのみならず、都市のトポロジーそのものを不可能としてしまう極めて雑多な人間形象が存在しています。

さて、この根源的な人類学的実体は、その断絶を通して再構築されなければなりません。それというのは、客体と主体の断絶です。しかしこの断絶は、こんにちでもなお発見的方法論としての価値を保持しているメソッド(〈コンリチェルカ〉のメソッド)からの断絶、あるいはその破棄を意味するわけではまったくありません。たとえば、ひとつモデルをあげましょう。人類学的アプローチは、大都市の生と生産の新たな諸条件において、認知労働者と向きあうことで、このメソッドを再び取り戻さなければならないのだと思います。このメソッドは、結合された工業労働者のなかに、抵抗の能力、そしてその能力を様々なかたちで包括的に発散する力を考察するものだったのです。

トマゼット

君は消費という主題、さらには貧困というテーマを引きあいに出しました。これらの要素になお立ち止まりましょう。

たとえば、若者の極めて高い失業率によって印づけられた西洋の都市空間の数々の分割に言及することで、「余剰」の条件、つまり生産、蓄積、価値増殖の諸過程に対する根源的な周縁性を特徴とした新たな貧困の条件が出現していると指摘する人がいます。この諸過程とは、都市空間の中心を徹底的に再配置してきたものにほかなりません。このパースペクティブによって、現代都市の分割が効果的に記述

されうると考えますか？

ネグリ

資本はこんにち、〈大都市〉の内部、つまりおのれの蓄積と価値増殖の特権的な場所の内部で、生産、蓄積の水準に配置される主体をはっきりと特定することには成功していません。これはまったく本当です。資本は主体を特定することに成功していません。しかしにもかかわらず、資本は、かれらを統治すること、「かれらを牧畜として飼いなすこと」、司牧者的な観点から、したがって極めて包括的なやり方で、かれらに指令をくだすことには成功しているわけです。

けれども、「全面的な」周縁化という水準が存在するというの——つまり「剥き出しの人間」が存在するというの——、また社会的組織のあらゆる形態の内側にそれが該当するというの、正確ではありません。少なくとも、その中心軸がロシアからアメリカにまで及び、それからBRICsにまで広がる大規模な「資本主義の中心」においては、正確ではないでしょう。さらに言えば、発展が「飛び越えて」起こるという点、この類の資本主義的發展が「飛び越えて」進むという点に注意を払う必要があるでしょう。つまり、いわゆる発展に対して完全に欄外にある何らかの地帯があるとしたら、それはもはや直線的なやり方で生じるのではなく、その後を経験する諸々の局面などが理由で生じるものだという事です（たとえば、こんにち携帯電話がアフリカでは極めて高い割合で普及していることが注目されます）。

要するに、全面的な周縁化は存在しません。それは、全面的な包摂という領域が存在しないのと同様です。だから、周縁化の神話化と、消費を通じた包摂の神話化には対抗する必要があるわけです。私には、「全面的な」排除というのは、論争を引き起こす最たる部分をなしているように思えます——哀れみ、同情、宗教的な盲信に基づいて構築される集団的行為の言い訳を打ち砕かなければなりません。貧困について論じるとき、私たちは、搾取される人びと、つまり、何かしら採掘メカニズムのもとにさらされている人びとに関わる諸条件こそを論じているわけです。搾取される人びとは、決して完全に貧しいわけではありません。何かを採掘するには、生産している人間の現実が必要なのです。かれらは、奴隷状態にある人びとでもないし、生産メカニズムから排除された人びとでもないのです。

トマゼット

さて、現代都市についてのまた別の急進的な視点にたどりつきましたね。デヴィッド・ハーヴェイは、最新の本——『反乱する都市』^{訳注10}——のなかで、マイケル・ハートとともになされた君の仕事に何度も言及しています。ハーヴェイは両方の側面、つまりレントと蓄積の側面と、闘争の側面の双方に沿いながら、〈大都市〉という主題の考察を進めていきます。

彼の提案は、実質的に、ルフェーヴル流の都市への権利を再び取り戻して、再創造し、現代に適応化させる可能性へと言及するものです。それは、コモニ化commoningという社会的実践のうえに、都市への権利を位置づけるためだということです。これは、私たちの時代の〈大都市〉に対応する戦略であると考えますか？

ネグリ

慎重に進みたいと思います。実際ところ、「都市への権利」というのはむしろ、歴史的なやり方で性格づけられるものだと思います。それは、ラ・クールヌーヴの地に住んでいて、パリの中心に、またはビヤンクールに働きにいった人びとの都市への権利です。つまり、惨めな郊外[パンリュールbanlieue]からやってきて、活気にあふれたすばらしい都市を横断する権利なのです。また別の例をあげて言うなら、それはトリノで仕事をするためにイタリア南部からやってきた労働者たちの権利、周辺地帯に閉じ込められずに、トリノの街を占拠するかれらの権利のことです。要するに、都市への権利は、フォード主義時代の都市のリストラクチャリングと結びついた概念であるわけです。これがルフェーヴルの都市であって、それはまだコモンの生産メカニズムを含み込んだものではなかったのです。

私からすれば、コモンの生産メカニズムこそが、こんにちの中心的要素であるように思われます。ハーヴェイ式の諸テーゼは、プロレタリア階級に〈大都市〉が与える分割をあまりにも強調しすぎです。それゆえ、それらのテーゼは、社会的結合、内的な再組織形成、蜂起の力量——都市のプロレタリア階級が、ポストフォード主義都市において示しはじめてきた力量——に比して、悲観主義的で否定的なビジョンを提案することとなっています。ハーヴェイの省察は、たとえば、認知労働の新たな主体が示している自律的な諸運動と新たな政治性をなおも察知するものではありません。

トマゼット

ハーヴェイは基本的に、資本主義の重大な危機の「都市の起源」を示す仕事をしています。危機のそれぞれにおいて、不動産市場の動きが果たす決定的な役割を分析することによってです。疑念の余地なく、2008年の暴落はまさにこうしたものでした。

さて、君は、このテーマが未来の展開を調査するうえでまた、決定的なものとなりうると考えますか？

ネグリ

私は、都市のレントの問題が、このように中心的なものであり続けるとは思いません。むしろ、この領域においては、資本主義の側の確固たる譲歩があると確信しています。都市のレントは、ある種の重要性を維持することでしょう。しかし、それはこのようなレベルにおいてのことではないように思えます。

私たちは、ドイツのような都市モデルへと進んでいくのではないのでしょうか。そこにおいては、不動産価値の他との混合がかなり広がっているのです。もちろん、ヴェネツィアやフィレンツェなどのような観光都市では、不動産はいつも莫大な価値を有するでしょう。「ビッグイベント」によって横断される場所の近隣においても同様です。しかし、より一般的には、〈大都市〉はハイブリッドな都市になるに違いありません。〈大都市〉それ自体を維持する諸コストと比べたとき、それは不可避なのです。つまり、コモンのコストこそが、より根本にある要素となっているのです。

しばらく前から、私は都市を再生産するための諸コストが、それを生産する都市レントの能力を超えていると主張しています。都市レントは、税金によって、そしてついには不動産所得を上回るサービスの諸コストによって攻撃されているのです。問題は、ジェントリフィケーションというよりも、こうした都市的消費が標準化されていることにあります。蓄積はいまや、全体的、包括的なやり方で動いている以下の機械を生産的に利用することを通じてこそ進んでいるのです。この機械というのは、アイデア、言語、潜勢力、生の様式、ネットワーク、知識、とりわけ協働を生産する機械にほかなりません。資本に極めて多大な費用を課すと同時に、極めて巨大な採掘＝もうけ——しかし、レントではなく、コモンの構造と結びついたものです——を与える莫大な「[社会的]結合行為」が存在しているわけなのです。

私からすれば要するに、私たちの都市は、不動産

に基づいてではなく、諸々のサービスの足し算と積分に基づいて構築されるということです。この装置が、都市を性格づけるわけです。というのは、それこそがまさに都市を工場として性格づけるものだからです。都市は、マルチチュードの工場です。この工場は、マルチチュードが生産しているという事実を示唆するのみならず、たえず拡張されるサービスの量についても言及するものなのです。

いまブロードバンドインターネットを都市で無料にするとすれば、それがなされるのは、マルチチュードが生産するから、人びとがそれを利用するから、人びとがそれを求めるから、都市をよりよく機能させるから、それを再領有する力量をもつ人びとがいるから、都市を横断する協働のひとつのかたちを示しているからです。

トマゼット

いまからは、もっと具体的に、主体性の生産と不服従の場所としての〈大都市〉の側面へと移動しましょう。近年のいくつかの出来事と経験にそって局面ごとの行程を、君に提示してきたいと思います。

最近、君はトルコとブラジルに旅行する機会を得ましたね。これらの国々は、まさしく〈大都市〉の動員と運動が生起していたところでした。ここからはじめましょう。君の意見では、これらの経験のもたらしたもっとも意義深い部分とはいかなるもののでしょうか？ オキュパイ Occupy と怒れる者たち Indignados のような運動との結びつきと断絶は、いかなるものなのでしょうか？

ネグリ

ブラジルでは、闘争は「都市への権利」の典型的な要求——都市交通機関の料金——に基づいてはじまっています。こうしてはじまりましたが、闘争はすぐに開発の諸政策に対する叛乱となります。それらの政策は、都市構造を一見再生産するものではありませんが、「大事業」、そして都市構造に対する大規模な介入と結びついています。とりわけリオにおいて、これらの政策は、サッカーの世界カップとオリンピックのようなビッグイベントに対する投資を、都市における排除と、大規模なコミュニティ組織、すなわちファヴェーラの私有的「奪回」という現代実践へと結びつけているのです。

ついでに、ここで先ほどふれたポイントに戻りましょう。ファヴェーラは、欠乏と貧困が「全面的な」ものとなりうると考える人々への生きた批判を具現化しています。ファヴェーラはむしろ、貧困のただなかにおいても、経済、生産的振る舞い、新しい

人類学的形象、新しい言語、高度な価値をもつ独自の文化、先住民のそれのみならず、まさしく真の〈大都市〉文化をつくりだす巨大な肺なのです。

もちろんファヴェーラには、たとえばドラッグ市場、それは倫理的-政治的観点からすると、コミュニティを本当に破壊するものですが、こうした道理をわきまえないいくつかのコミュニティ的要素もまた生きています。それらについては、——危機が核心にまで達するときを除けば——〈大都市〉を研究する社会学者たちによってはあまりもわずかしき議論されていませんね。

ブラジルでは、闘争はこうしてはじまりましたが、次に、都市のリストラクチャリングというテーマのみならず、都市が奴隷制から解放されたときに形成された白い〈大都市〉意識を示すあらゆる象徴と防御物を標的にするようになりました。ファヴェーラは、〈大都市〉の内部に生きる「もうひとつの都市」なのです。というわけで、ファヴェーラへの攻撃は、重要なポイントとなりました。「都市開発」政策はそこにおいて、途方に暮れるしかなかったのです。ファヴェーラは「他者」ではありますが、いつも〈大都市〉生産の内部にあることが忘れられているのです。

労働者党PT、つまり計画経済をすすめる社会主義政府の指導集団は、言葉のもっとも厳密な意味において、開発＝発展と工業生産を混同していました。この古い工業主義のおろかさは、豊かで活気にあふれる抵抗によってすぐに暴露されました。反対行動は、極めて力強いものでした。もちろんそれは、[イスタンブールの] ゲジ公園と同様に、「生態学的な」性格のものではありません。反対行動は、〈大都市〉内部の生きた共同空間を維持することに向けられているのです。ここにこそ、人類学的突然変異があるのだと思います。工業労働者は都市を工場と同一視し、都市から逃亡していました。こんにちでは反対に、〈大都市〉へのこのような帰還があるのです。これはそこにおいて、社会的生産のコミュニオンが発見されているからにほかなりません。〈大都市〉の特徴は、生態学的なものではありません。生産的であることなのです。ゲジ公園の叛乱も、リオとサンパウロの叛乱も、間違いなくここにおいて、行動をしているわけですから…。

トマゼット

…開発＝発展の内部において、開発＝発展に抗う闘争について語ってくれませんか？

ネグリ

むしろ、開発＝発展に抗う闘争、資本主義的発展

に敵対する生産的闘争と言えるでしょうか。生産と発展を根源的に区別することからはじめる必要があります。これについて言えば、「加速派政治宣言」^{註12}——私は最近、エウロノマデEuroNomade上で、それについてコメントしました^{註12}——は、とてもすばらしく、また正確なものです。資本主義的発展という概念に敵対する生産の概念を再び取り戻す必要があるのです。

またこれは確実に、イスタンブールにあてはまることです。そこにおいては、認知労働に従事するいくらかの層は、完全にヨーロッパ化されており、パリやベルリンで見つけられる認知労働の層とまったく同様です。イスタンブールのこれらの層は、かれらの言語を理解できないエリートは無能力さに、極めて激しいやり方で反発したわけですが（アンカラの状況は異なります。そこでは反対に、世俗性と結びついた政治的要素がより目立っていました。それは政府のイスラーム原理主義による締めつけが非常に重くのしかかってきたからです）。問題は、認知労働者たちによってつくられた生産的コミュニティの承認要求です。認知労働者に対しては、とりわけ資本の側からの価値の採掘が作動しています。あいまいで両義的であるとはいえ、極めて現実的でもあるこの領域においてこそ、たとえば、ハーヴェイによって記述された現実に対する根源的な変容が引き起こされてきたのです。

この観点から、オキュパイと怒れる者たちのような経験もまた考察されねばなりません。明らかにそれらは危機に対する闘争です。その理由は、危機が西洋においてその輪郭を露わにしてきたそのやり方にあります。つまり、採掘的資本の欲求に基づいて社会の型をつくり直すために、社会がその全体において再配置編成されるという危機です。それゆえに、〈大都市〉を、分業をあらためて組織するプロセスが問題とされるわけです。それは福祉の破壊、新たなヒエラルキーの構築を予見するものでしょう。これが理由で、スペインからギリシャにかけて——イタリアでもです。たとえば、[2013年]10月19日のデモ行進において——、福祉をめぐる闘争が、一種の〈大都市社会的サンディカリズム〉^{註13}として、〈大都市〉領域のなかで、おのれの特徴を浮かびあがらせてきたのです。

トマゼット

さて、こうして私たちは怒れる者たちの運動とオキュパイへとやってきました。これらは、危機のなかで生まれ、危機によって生みだされた、危機に敵

対する運動です。

しかし次に、いくつかの面においては驚くべきやり方で、根源的民主主義の要求の周辺において、おのれの言説を組織した運動でもあります。それらは、直に社会的-経済的要求ではなく、この言説を自身のもっとも重要で、もっとも破壊的な暗号としてきた運動ですね…。

ネグリ

…君に同意します。けれども、こうしたやり方でこれらの運動に言及することで、固有に〈大都市〉的である言説から、私たちが遠ざかってしまうことを望みません。とにかく重要なことは、この政治的変転、闘争の経験については、受け入れられなければならないポイントと、反対に批判にゆだねなければならないポイントがはっきりしているということです。

こうした動員のテクスチュアによってほのめかされている全面的な水平性——構成する局面においても、未来の想像上の〔政体〕構成においても——というのは、私には、完全に抽象的な政治構造モデルのように思えます。それは、興奮の局面においては絶大な効果を持ちうるでしょうが、構成的変容のプロセスを真に構築し管理運営しようとするときには、道を誤らせてしまうものです。むしろ私は、〈対抗権力〉contropotere、よりうまく言えば、拡散する数々の〈対抗権力〉モデルについて考えています。これは——こんにち、あらゆる政治運動が引き受け、その能力を十分に発揮させなければならない領域的〔＝地域的〕かつ空間的な多様性を無視して、自身が無力であることをさらしてきた水平性に比して——、よりオープンで、構成するプロセスの様々な様式と困難を、効果的に、現実的に媒介できる力を持つモデルであると思います。

怒れる者たちは、領域〔＝地域〕のなかにその身を置いたときに、前へと進む真の跳躍を生みだしました。ゲジ公園の叛乱は、地区に根づくとき、すなわち、あらゆる地区が実効的な対抗権力を組織するときに、そしてこれらが指令の構造を垂直的に攻撃できるようになるときに、重要なものとなるのです。またよく眺めるなら、長続きするプロジェクトを構築するときに、全面的な水平性モデルの妥当さを実際に否定しているのは、新しい〈大都市〉の構成そのものなのです。

トマゼット

アメリカの経験についても同様の言説があてはまるのでしょうか？

ネグリ

オキュパイについて言えば、状況は部分的に異なります。そこでは、住居からの立ち退き問題、したがって借金という主題から生まれている複雑な運動が問題となっています。借金についての言説を通してこそ、この運動はウォールストリートへと移動するわけです。

ただしこの運動は、この水準においては、わずかなものしか生みだしてはいません。アメリカの闘争として、世界じゅうで「みられる」という多大な象徴的力を除いては、効果の領域において評価されるなら、それは近年のもっとも脆弱な経験のひとつだったのです。実際、それは手厳しいやり方で、権力に打ち倒されてしまいました。一方では、「二重の過激主義」の言説——「オキュパイ対ティーパーティー」——を通して、他方では、民主党の政策のある種の急進的変化とともに。後者は、デブラシオ市長の選出へと至った選挙の変転のなかへと運動を吸収することとなりました。

いずれにせよ、オキュパイの重要な要素は、住居に結びついた動員、不動産レントに抗する動員として、〈大都市サンディカリズム〉のあらゆる課題にとって中心をなす要素のまわりで出現したという事実にあるのだと思います。

トマゼット

私たちは、直近のもっとも重要な運動と闘争に軽く触れたように思われます。いまや私たちは、典型的に〈大都市〉的ではありますが、政治という観点からするとより「疑わしいもの」にもみえてしまうまた別の現象へとたどりつきました。暴動です。

それは1992年のロサンゼルス市の叛乱から、フランスの郊外における2005年の出来事を経由して、2011年のロンドンの暴動へと至るものです。つまり、集団レベルで発現するこの新たな社会的振る舞いは、およそその客観的な特徴と定義されるくらいに、都市領域に根づいたものであるように思えるのです——私たちの時代においては、この現象が堅固なものとして存在し、時代のただなかへと浸透していることを示そうとしている、君の友人アラン・ベルソによる『現在の政治的エスノグラフィ』という仕事によって示されているように。

『コモンウェルス』のなかでは、「反逆の系譜学」の箇所が、この主題にあてられていましたね。それは民衆蜂起の長い歴史から、現代の都市暴動にまで及ぶものでした。そこでは、これらの都市暴動は憤激の感情によって突き動かされた「自由の行使」として

定義されていました。それはまだ不十分なのですが、こんにちでは「民衆蜂起や、再領有のための闘争、〈大都市〉の蜂起などは、資本主義的な生権力の本質的な敵となる」ほどまでに、確実に必要とされるものだというわけです。

しかし、問題は、これらがときに「不可解なもの」であり続ける出来事であるということです。なぜなら、それらはもっとも伝統的な諸観念を通じては把握することが難しいものだからです。近代政治思想によって、私たちは、そうした観念を用いて社会的現実を解説するよう習慣づけられてきましたが、結果的に、その言説秩序はきまって、これらの現象に根源的な非政治性の烙印を押してしまうわけなのです。非政治性のこの言説について、どのように考えますか？ また、現代の都市暴動を解説するうえで、どのような鍵となる論点を提出するのでしょうか？

ネグリ

問題は、その起源に、いつも警察の手による若者の死が存在する出来事だということです。いわば、排除を代理表象するために、象徴的なかたちで死ぬ誰かがいるのです。したがって、民主主義秩序、形式的な平等秩序のもたらす諸効果には、他律性が存在しているということです。この他律性が、ここにおいては爆発しているのです。

本質的にこれらの叛乱は、典型的な政治的に行い、つまり権力による不当な殺人という行いに対峙して起こっています。それゆえ、これらの叛乱を非政治的と定義するのは愚かなことです。なぜなら、問題となっているのは、基本的な権利、生存権の侮辱から生まれている叛乱だからです。アンティゴネーの悲劇は、非政治的なものでしょうか？ そこには政治的憤激があります。この政治的憤激は、怒りと暴動を拡大させるべく、より技術的に準備され、浸透性にあふれた〈大都市〉テクスチュアのただなかへと広がるのです。大切なことは、それが新しいコミュニケーション手段を通じて広がり、組織される闘争であるということでしょう。ただしそれは、隠されることと明示されることの混ざりあいという、民衆蜂起のいつもの特徴のなかでなされます。

さらに言うなら、これらの闘争は、極めて正確な中身を有しています。そこにおいては、税金が布告される要地が攻撃され、税を払わねばならない可哀想な人びとがしるされた名簿が燃やされていたのです。これが、闘争の中身です。ブルジョアたちが以下のように自負していることは、強調されるに値します。自分たちが税について語るときは、政治的な

ことが問題となる。でも貧民が税について語るときは、非政治的なのだと。

はっきりしていますが、もしただ諸権利の形式上の一覧、そして議会代表制を通じたそれらの翻訳についてのみ言及するかたちで、政治が考えられるとすると、これらの運動は容易に「非政治的」と定義されることでしょう。いっさいは、政治がいかに考えられるかということに依拠しています。もしマルクス主義者によって政治が考えられるなら、政治とは、労働市場と賃金の構造、そしてそれらを規定する資本主義的秩序を粉碎する力量のことでしょう。この場合、都市的不服従の諸現象を、政治的地平から排除することは困難となります。先ほどとは逆に、これらは、〈大都市〉の社会的領域においてなされる真正銘の労働組合的、あるいは政治的闘争であるように思えるわけです。というのは、それらが労働市場の人種による組織化、すなわち賃金の適用、低い再配分と労働力——可変資本——の配置が操作されることを通じてなされる排除に攻撃を加えているからでしょう。

これらの闘争の自然発生性もまた、重要な政治的特徴を有しています。いずれにせよ、それはいつもただ端緒における自然発生性ではありません。なぜなら、憤激、表現、反復は、いつも組織化の諸要素をもたらすからです。これらが安定した構造のなかでおのれを展開することに成功するか否か。それは、私たちのこの会話の範囲を超える問題ですね。

トマゼット

要するに君は、工場としての〈大都市〉、ポストフォード主義の〈大都市〉にかんする言説は、この[暴動]のような社会的現象と集団的振る舞いの分析もそこに位置づけられるべき枠組みであると考えているわけですね？

ネグリ

まさにそのように考えています。思うに、生産的、ポストフォード主義的な〈大都市〉の言説は、これらの現象が徹底して理解される唯一の枠組みではないでしょうか。現代の〈大都市〉では、資本の生権力と諸主体の生政治が、混ざりあいつつも対峙しあっているわけです。この条件が同じくらいはっきりと与えられている場所は他にはないでしょう。現代の〈大都市〉において、叛乱は、基本的な権利——生存権——の侵害から発生します。叛乱はそこから広がり、普通はもっとも抑圧をもたらしている部分に対してその力が傾けられます。

これらの叛乱は、きまって人種的な次元と、それ

に由来する排除と差別に関係してきました。そこには、消費からの排除という論点もまた含まれることでしょう。これが、最近の「暴徒たち」に起こったように、財を領有する叛乱が具現化していることの理由ですね。消費への要求を通して、排除の人種差別に対する闘争は、財を領有する叛乱において、階級の規定性をも証明しているわけです。人種と階級の要素は、まさしく消費の領有へと向かう衝動のうでで交差しているのです。このいっさいは、問題点、貧困、搾取が、いかなるものであるかを示すうえで、かなり有効なものでしょう。ブルジョア連中が、自分たちにだけ割り当てられた財を奪取するこれらの若者たちを罵倒しています。それを耳にしていると、私は愉快的気分になってきますね。

トマゼット

君はすでに人種という主題についても切りだしてくれました。それは、〈大都市〉のこれらの現象を解説する重要な鍵のひとつとして浮かびあがってきたわけです。この多形的かつ多義的な解説の鍵は、さらに様々なパースペクティブからも用いられてきたものです。反動的でセキュリティの強化を目論む言説から、ポスト・コロナルな蜂起の輪郭を見分けようとする言説、そして承認というカテゴリーへと様々に言及してきたすべての解釈にまで及びます…。

ネグリ

確かにそうですね。承認は重要なカテゴリーですが、この主題には注意が必要です。おそらく、承認というテーマは、この類の叛乱よりも、「組織された労働の流刑地」にいるさらに別の諸階層によりあてはまるものでしょう。ここで言及している叛乱にとっての承認要求は、宗教的領域において実現されるのかもしれませんが。承認というテーマはいつも、抵抗を遮断、あるいは内面へと閉じ込める要素と結びついた両義性をもたらします。それらは、ブルジョアたちによって、〈大都市〉の多色的、多文化的群衆のなかに、狡猾なやり方で注入されようとするものなのです。

私たちの観点からすれば、この言説は反対に、人種という水準において苛烈に特徴づけられた主体性へと言及するものです。それは1990年代以来、ロサンゼルスから、最近のロンドンに至るまでの暴動の跡において生じている通りです。こんにちにおいてはブラジルでも生じている通りです。また、そこにおいては——これを強調しておくのがよいでしょう——、一方の認知労働者たちと、他方のファヴェー

ラの若者たち、人種に基づいた支配がなされた数世紀後に言葉への権利を奪取するこの若者たちが、闘争のただなかでともに承認しあっているのです。人種的な観点に含意された資本主義的支配の厳格性が破壊されているわけです。これはとてつもない出来事をなしています。

要するに、数々の〈大都市〉叛乱の原因と特質は、極めて様々なものでありうるわけですが、それに固有の特徴は、「叛乱が何に対してなされているのか」への応答のなかに見出されるのだと思います。現在、人種の視座からは烙印を押された人たちが、ある種の資本主義的秩序に対して叛乱を起こしています。正規の労働、正規労働市場の構造から排除された人たちが、搾取の負荷が増加することに叛乱を起こしています。いずれにせよ、これらの排除された者たちは、搾取から、蓄積から排除されているわけではありません。とするなら、政治的観点から考察するときの重大な問題は、このような過程の内側にいながら、もし必要ならば、それがただ承認(きまってアイデンティティに基づいた承認、あるいはそれぞれが独立して自主的に再生産されるアイデンティティに基づいた承認)という観点から語られるときに、その過程をうまく打ち砕くことにあります。これは、搾取をもたらず指令の個別的な多様性あるいは単一性が、万人に等しく課されていることを認めるためにほかなりません。

トマゼット

君は、現代の都市暴動の起源に、ほとんどいつも殺人を引き起こす警察の暴力的な振る舞いがあることを正確に強調しましたね。これは、以下のテーマへと私たちを導くものです。それは、例外の政治空間としての〈大都市〉というものです。〈大都市〉は、国家的権威が権利、諸権利、法をあるときには宙づりにして、秩序がそれに基礎を置いている力、さらには秩序を保証する力のみにも効力をもたせる場所なのではないでしょうか。このテーマ、それが私たちの時代において有する重要性を、どのように解釈しますか？

ネグリ

疑念の余地なく、秩序の規範を例外化する試みが、頻繁に繰り返されています。しかしながら、それが繰り返されているという事実が、すでにそれが不変のものではないことを示していると言えます。例外というのは、制御が不安定なときに、制御をはっきりとさせるべく発動される必要物です。つまり、決して忘れられてはならないのは、以下です。規則／

例外関係における決定的な要素は、国家の統制、主権権力の側による制御の行使であるということ。このパースペクティブにおいては、憲法の観点から行使される主権の「例外」（独裁）と、治安を維持する目的で発令される例外的諸規定を混同してはなりません。

このいっさいによって、私たちはジェノヴァの記憶^{註14}へと連れ戻されます。しかし、私には、この種の例外性のほうが、憲法のそれよりも起こる可能性の高い（幸運なことに）もののように思われます。これはつまり、あまりにも頻繁になされていますが———わずかばかり合理的かつ「過激主義的」なやり方で———一方と他方を同一視してしまうのは非常に危険であるように思えるということです。

私の意見では、例外という観念は、基本的に、階級闘争のかなり高次の諸契機に結びついたものです。したがって、それは抗争の高度＝程度にもまた従属しているわけです———だからそれは、アガンベンやその他の人びとが、気取った形而上学的なやり方で、あるいは無邪気に無政府主義的なやり方で述べるようなものではないのです。経営者＝支配者が、すべてではないとしても、いくらかのことが、かれらにとってうまくいっているときに、なぜ自己の権力を例外として認めなければならないのか、例外を企てねばならないのかが考察されていないのです。

いつ、どのように、例外は打ち立てられ、自己を治安維持措置から憲法的＝構成的規範へと改変しうるのか。それを理解するためには、戦争関係としての階級関係へとさかのぼらなければなりません。古代ローマの偉大な歴史家たち、キケロふうの政治家たちの政治学は、この分岐点に非常に注意を払っていました。タキトゥスは、例外がそうしないと解決不可能な抗争の諸契機と結びついていることを示す仕事をしていました。私たちが永続する戦争状態のなかに身を置いている———これは私にはとても奇妙に思えます———などと主張しなければ、例外は、戦争状態があるときに姿をあらわすと言えるわけです。暴力———例外の暴力、つまりシステムによって日常的に行使される隠されたより効果的なそれとは異なる暴力———は、権力が何かしらその必要性と切迫性を有するときに炸裂するのです。

トマゼット

したがって、君の言説においては、例外というテーマは、階級の抗争性というテーマと結びついているように思えるわけです。前世紀のはじめに、すでにヴァルター・ベンヤミンによって注目されていたよ

うに、西洋の労働運動を担う諸団体は、暴力をただストライキの諸形態のなかで突き出されるもの、「代理表象」されるものとする一方で、暴力への訴えを徐々に抗争から締めだそうとしていました。それとは反対なのですが、ミシェル・ヴィヴィオルカは、現在のいくつかの現象を調査することで、「抗争なき暴力」について論じました。これというのは、私たちの時代を理解させてくれるカテゴリーであると思われるでしょうか？

ネグリ

それとは逆です。抗争はある。私はこう思うわけです。極限にまで運ばれた抗争がなければ、危機とはいったい何でしょうか？ 1973年のポスト近代的最初の危機がその気配を示して以来、抗争は継続しています。危機の40年間は、おそらくは資本に都合のよいかたちで終わりを迎えているところですが、それは蓄積諸形態の根源的な再配置編成を決定づけるものでした。しかしながら、「蓄積としての資本主義」———あらゆる尺度から、賃金と可変資本とのあらゆる関係から完全に独立した新たな本源的蓄積———の長期間におよぶ再構成に直面して、成長をとげ解決不可能となった危機などではなく、認知プロレタリア階級の生産的「過剰性」がそこに立脚する執拗な抵抗、社会的な広がりをもよおさせる抵抗が姿をあらわしているのです。抗争は存続しているのです。

このパースペクティブのなかでは、「抗争なき暴力」というカテゴリーは、私には奇妙に鳴り響いてしまいます。それは暴力の名のもとで、抗争を追い払ういつもの定式———国家規範の完全なる例外性という考え方とよく似た響きを有するものです———のひとつでしょう。抗争は暴力なしでもいつもある。その次に、暴力がやってくるのです。

それはなぜでしょうか？ いわゆる「過激主義者」の暴力について考察してみましょう。その暴力はいかなるものだったのか？ それは、運動が強いられた暴力でした。というのは、誰も運動に耳を貸さなかったからです。この暴力は、それでもひとつの力であったわけですが、その声は〔政体〕構成的な水準においては聞きとることのできないものでした。1970年代をつくりあげた人びとの大きな悲憤は、暴力を行使したということよりも、耳を傾けてもらえない、聞いてもらえるのに十分な抵抗の過剰性を行使することに成功しなかったということにあるのです。そこには、客観的なものとなるまでに至っていた過剰性がありました。それは、工場闘争、社会闘争のなか、巨大な興奮にみだされた状況のただなか

にあったわけです。しかし、[政体]構成的水準において、それが聞きとれないものとなったとき、この過剰性は、社会的領域において自身をより強化するどころか、ただちに軍事的な逃走線を引き受けることになってしまいました。またそれゆえに、軍事的に弾圧されてしまったのです。

というわけで、抗争はある——そこにおいて仕事を行い、「例外」を遮断する「過剰性」を発展させなければならぬのです。

トマゼット

さて私たちは、はじめの主題から遠ざかってきてしまいましたね。では、ここでたどり着いたこの問題系で締めくくるとしましょう。

『ディオニュソスの労働』^{訳注15}において、君たちは「暴力の実践批判」を提出していました。それは暴力の分析を、抽象的思弁の領域から引き離し、暴力を物質的に表出させる行為についての調査研究のなかに位置づけようとするものでした。では、暴力／恐怖がおりなしている循環、現代都市の多くの表象に内在する基本的暗号であると思われるこの循環にかんする短い省察を行うことで、ぼくたちのこのおしゃべりを終わりとしましょう。

ネグリ

暴力の過剰決定性それ自体を、決して作動させるべきではありません。何よりもまず、警官への拳は、殺人行為と同じではありません。反対にこんちでは、あらゆる類の犯罪、暴力が、主権に対する犯罪として性格づけられてしまっています。これは馬鹿げたことです。なぜなら、そうなると、どのような暴力的行いに対しても、殺人とのあいだの相同性が提出されてしまうからです。つまりこれは、社会的抗争を過剰決定することによって、すべてを均質化する主権のメカニズムにほかなりません。

第二に、暴力はいつも存在します。暴力は、抑圧すべき要素ではなく、組織化すべき要素であるということです。暴力は、自然的所与として存在するものではありません。暴力は、システム、つまり正当とみなされた暴力を行使するシステムの構造と結びついたものです。したがって、問題は暴力ではありません。そうだとすれば、問題は暴力の正当性、そしてあらゆる類の破壊的組織をめぐる正当性にこそあるのです。

では、正当性とは何でしょうか？ それは、一方における指令の行使と、他方における、その名のもとで指令が行使される目的へのコンセンサスとのあいだで築かれる関係のことです。この関係が、ただ

資本主義的発展の要求によってのみ規定されるさいには、とりわけ広い余白が存在することになります。この余白に対しては、正当性の行使が機能しない、弱まる、あるいはゆがんでしまうわけです。とするなら、このような条件のなかで課される正当性というのは、暴力と等しいものでしょう。国家の名のもとで課される資本主義的秩序へのリアクションがあるとすれば、それは暴力的なものでしかありえませんし、正当なものでしかありえません。それが、よごれた暴力——資本の権力を包み隠す法的秩序の暴力——から解放されている限りにおいては、このように言えるのです。

これは暴力というより、反暴力、対抗権力、正当性のある対抗的表現であると言えます。私は、不正な秩序への抵抗に関するあらゆる振る舞いが正当であると考えます。しかし、秩序が正しいのか否かを誰が決めるのでしょうか？ 一方には、それぞれの主体の意識が存在しています。それは、資本主義的社会関係が発展する内部で、歴史的におのれを変更してきたものです。他方には、それに対峙する指令の諸機能の働きがあります。この関係からこそ、正当性を定義するという問題は生まれます。この観点からすれば、暴力は権力を定義するわけですが、その反対物、諸主体の生政治的潜勢力もまた定義するものなのです。

というわけで、正当性を保証する客観的な方法はありません。それは正当性がいつも、そしてただ関係でしかないからあり、手段＝媒介だからでもあります。それゆえに、ベンヤミンのような著作家たちもまた、批判的なまなざしで考察されなければなりません。かれらはナチ体制の暴力に急襲されたとき、それについてうまく説明を加えられずに、神学的な観点からその暴力をとりあげたのです。またきまってかれらは、1920年代のコミュニストの政治に対して自己批判を行うことを放棄していました——ベンヤミンの場合はそうではありませんが。

暴力の非合理性という観念は、ブルジョア文化において根本をなすものです。なぜならブルジョア文化は、資本主義的な支配形態以外の民主主義的指令を行使することには一度も成功してこなかったからです。その一方で、人権が形式的に(市場の規則)ではなく、物質的に(コモンの制度)認められるときには、民主主義は支配の反対物でもありうるでしょう。このように、合意されたときにのみ暴力が引き起こされるとする枠組みにおいては、コンセンサスは賞賛されることでしょう。このコンセンサスは、代表制のメカニズムによってではなく、実質的な参加に

よって与えられるわけですから。

私たちは、暴力を追い払う方向へと進みたいのでしょうか？ たとえば、スピノザの絶対的民主主義モデルは、そこにおいて最小の暴力が可能となるモデルでしょう。なぜなら、そのモデルは、あらゆる社会的行程を決定するさいには、平等の領域にいる万人の実効的コンセンサスを伴うものだからです。けれども、この場合でも、人間はいつも善良というわけではありませんので、この過程を保証するべく機能する実効的な対抗権力が必要となるのです。

最後に、恐怖というのは、体系的な暴力をつくりだすうえでの根本的な要素です。恐怖はまた、そこにおいて主権の高みが構築される本質的概念(情念)でもあります。恐怖はいつも、他者に対する人間の恐怖です。主権は、個人主義社会における「人間は人間にとって狼である」という恐怖を取り去ってくれるに違いない。それゆえに恐怖は、主権がそれに基づいて構築される土台にほかならないわけです。

ただし、以下のことは明らかでしょう。それはこのすべてがあまり説得的ではないということ、このすべてが唯一のありうる社会的秩序——個人主義とブルジョアのそれ——にとっての必要不可欠な道具になっているということです。

しかしいずれにしても、恐怖というものが、このホップズ流の枠組みにおいては、個々人の諸権利の譲渡を通して、主権権力を組織する建設的要素であったことは考察するに値します。その後、秩序が続いていたわけです。今では反対に、恐怖は秩序を構築するのではなく、不安定性を組織し、恐怖を再生産しています。恐怖は、私たちの生にかかわるあらゆる装置からなる巨大な大陸となっています。だから、欲望はもはや恐怖から安全へとすすむわけではありません。恐怖から恐怖へ、不確実性から不確実性へとすすむのです。恐怖は主権を生み出すのではなく、支配を広げます。そして支配を再生産するのです。それは、個々人が他者に対して恐怖を抱かねばならない、夜は外出することができない、女性はある曲がり角にいる強姦魔に注意しなければならない、テレビは犯罪と警察にかかわる事柄だけを放送しているなどといった意味においてのことです。こうした理由で、恐怖は資本主義的な社会的諸形態を再組織化し維持するうえでの中心的要素であるわけです。それはおそらく、新自由主義的民主主義の危機がもたらすもっとも鬱々たる地点を具現するものでしょう。こんにちでは、平静でいることが、革命的な態度として引き受けられうるくらいに。

2014年1月 フィレンツェ

訳注

訳注1 これは以下の文献である。Antonio Negri, *Dalla fabbrica alla metropoli: saggi politici*, Roma: Datanews, 2008. またこのイタリア語の著書の内容に、『空間・社会・地理思想』本号のインタビューなどを含んで、ボリュームを増した英語バージョンが、トマゼットの編集によって、2018年に入ってから出版された。Antonio Negri, *From the Factory to the Metropolis: Essays Volume 2*, Cambridge and Medford: Polity, 2018.

訳注2 Toni Negri, *Per la costruzione di coalizioni multinazionali in Europa*, 2013, <http://www.euronomade.info/?p=235>, <https://europassignano2013.wordpress.com/2013/08/31/per-la-costruzione-di-coalizioni-multinazionali-in-europa-toni-negri> このテキストは、ネグリの関わる「エウロノマデEuroNomade」という政治的コレクティブによって、2013年夏に開催されたセミナーのために用意されたものである。オリジナルのイタリア語版でこれらのウェブサイト上には掲載されているが、英語版、スペイン語版へのリンクが貼られている。

訳注3 オペライズモoperaismoとは、マルクスの思想をベースとしたイタリアの「異端的」な理論的・政治的潮流のことである。主に1960年代に、ラニエロ・パンツイエーリ、マリオ・トロンティ、アントニオ・ネグリのら仕事を通じて知的かつ実践的に展開された。マルクスを、急進的な労働者たちの闘争、党や組合から自立的におのれの力量を通じてなされる闘争という枠組みにおいて読み直しをはかることで、オペライズモは新しい概念(労働の拒否、階級構成、大衆の労働者など)や労働者調査の方法論を生み出した。とりわけ、資本主義的発展と労働者の闘争とのあいだの古典的な図式を反転させ、労働者の闘争こそが資本主義的発展の現実の動的要素となっている、後者は前者に従属することを認めなければならないという視点は、伝統的なマルクス主義に対する「コペルニクスの転回」とも称されるものであった。こうして、『経済学批判要綱』のなかでマルクスが用いた「生きた労働」の主体性、自律性が強調されることで、階級構成の変化、さらには階級関係の動態性や敵対性が分析可能となった。オペライズモには、いくつかの重要な雑誌・新聞があった。『クアデルニ・ロッシQuaderni Rossi[赤い手帖]』誌、『クラッセ・オペライアClasse Operaia[労働者階級]』紙などである。ポスト・オペライズモpost-operaismoは、オペライズモのこの遺産が、1990年前後から再び読み直され、とりわけ同時代のポストフォード主義とそこにおける労働の構成、階級構成の読解において、さらに練りあげられてきた流れを指す(しかし、それもまたオペ

ライズモに変わらないとする立場もある)。そこにおいては、労働の認知化、つまり認知労働、さらには非物質的労働、生政治的労働という概念などが重視されてきた。このあたりの歴史的過程については、北川真也「イタリア、1977年以後」、フランコ・ベラルディ（ビフォ）、『NO FUTURE——イタリア・アウトノミア運動史』（廣瀬 純、北川真也訳、洛北出版、2010）、273-308頁。

訳注4 ネグリはここにおいて、オペライズモの方法論のある種の「見直し」を唱えている。資本に実質的に包摂された社会、つまり政治の自律的領域が消失した社会（既存の民主主義制度の媒介の消失）において、政治的主体、つまり階級の政治的構成が不明瞭となるなかで、政治を行うとは何を意味するのかと問うている。資本の関係の内部に組み込まれた、マルチチュードをおこなす特異性は、可変資本としてはなおも他動的でありうるとしても、もはや資本の関係のなかでは自動詞的に作用するものとなっている。この関係の内部で階級としては、つまり敵対的主体性としては、おのれを表現することができていない。問題は、階級的敵対性、さらにはマルクス、コミュニズムを手放さずに、オペライズモの〈コンリチュエルカ〉などの方法論や階級構成などの概念を、情勢下において刷新することである。

訳注5 本インタビュー内容からも明らかであるが、「探掘主義estrattivismo」、あるいは「新探掘主義neo-estrattivismo」は、現代の資本と労働の関係、固定資本自体をおのれの労働する能力、労働力の内側に領有することで、認知労働者たちが自律的につくりだす社会的協働からの富の抽出をとらえる上で、ネグリをはじめ、現代資本主義を批判的に読解する人たちによって論じられてきた。以下も参照。サンドロ・メッザードラ、北川真也「危機のヨーロッパ——移民・難民、階級構成、ポストコロニアル資本主義（後篇）」人文書院、2016、<http://www.jimbunshoin.co.jp/news/n14769.html>、また廣瀬 純「「新開発主義」とは何か——ラテンアメリカ／進歩派政権／新探掘主義」（廣瀬 純『暴力階級とは何か——情勢下の政治哲学2011-2015』航思社、2015）、237-241頁。

訳注6 固定資本の労働の側からの領有とは、工業時代において、死んだ労働として資本によって領有され、労働者に敵対するかたちで用意されていた機械装置、さらにはそれを駆動させていた知が、現在においては、労働者の脳と身体、つまり労働する能力、労働力のなかにも統合されているさまを指す。固定資本は人間それ自身なのである。それは認知労働者が、デジタル・ネットワークを通して社会

的協働を自律的に生産する状況に顕著であるときれる。しかしこの再領有が、資本の指令のもとでなされているため、それを転覆する敵対性が探求されなければならない。Toni Negri, *Appropriazione del capitale fisso: una metafora?*, 2017, <http://www.euronomade.info/?p=8936>

訳注7 アントニオ・ネグリ、マイケル・ハート（水嶋一憲監訳、幾島幸子、古賀祥子訳）『コモンウェルス——〈帝国〉を超える革命論（上・下）』NHK出版、2012。オリジナルの英語版は、2009年出版。

訳注8 これはローマーノ・アルクアーティRomano Alquatiのメソッドを指している。アルクアーティは、オペライズモに関わり、『クアデルニ・ロッシ』誌上に、トリノとその周辺のフィアット社やオリヴェッティ社などの労働者たちについての素晴らしい文章を残した。〈コンリチュエルカ〉、つまり〈共同研究〉とは、主に彼が中心となって作成した労働者調査、あるいは知を生産する、さらには集団的主体性を生産する政治的・敵対的メソッドを指す。それは、調査者と被調査者とのあいだの緊密な相互関係に基づいたメソッドであり、「行動を生じさせる、行動を確立する」というはっきりとした目的を有する。「知はただ行動へと道を譲るのみならず、それを引き起こさなければならない」。Toni Negri (Girolamo De Michele, a cura di), *Storia di un comunista*, Milano: Ponte alle Grazie, 2015, p. 212.

訳注9 ここは単純に「機械的meccanico」ではなくて「機械状macchinico」であることを強調しておく。固定資本が労働力の側によって再領有された時代に出現する主体性において、物質的かつ非物質的機械、さらには社会的生産を結晶化させる知識が、現在において協働し生産する社会的諸主体のなかに再統合される状況を示す。フェリックス・ガタリを引きながら、機械状であることは、人間から分離したテクノロジーの実在性という観念と対立するものであると論じられる。人間は、機械状諸関係の内部に組み込まれているし、人間の身体と人間社会の内部に機械は組み込まれている。Toni Negri, *Appropriazione del capitale fisso: una metafora?*, 2017, <http://www.euronomade.info/?p=8936>

訳注10 デヴィッド・ハーヴェイ（森田成也、大屋定晴、中村好孝、新井大輔訳）『反乱する都市——資本のアーバナイゼーションと都市の再創造』作品社、2013。原著は2012年。

訳注11 「加速派政治宣言」は、アレックス・ウィリアムズとニック・スルニチュクによって書かれた。加速主義政治は、かれらによると、新自由主義の資本

主義に対して、福祉国家への帰還という不可能な選択、あるいは水平的な社会政治的関係を確保する小さな共同空間しか提示できない左翼の政治的想像力の欠如を克服するためのものだとされる。かれらは、資本主義の内部で生まれたが、その生産物を価値の言語へと翻訳するために、資本主義自身がその発展を制限しているテクノロジーの生産諸力をさらに発展させる必要性を説く。テクノロジーそれ自体が問題ではない。それを利用する、それをおのれのうちにはめこんでいる資本主義の既存のプラットフォームが問題なのである。テクノロジーの前進はすすめられなければならないし、左翼はそれを利用しなければならないと。Alex Williams e Nick Srnicek, *Manifesto per una politica accelerazionista* (Matteo Pasquinelli, a cura di, *Gli algoritmi del capitale: accelerazionismo, macchine della conoscenza e autonomia del comune*, Verona: ombre corte, 2014), pp. 17-28. 最近、日本語にも翻訳された。ニック・スルニチェク、アレックス・ウィリアムズ(水嶋一憲、渡邊雄介訳)「加速派政治宣言」現代思想46-1、2017、176-186頁。

訳注12 Toni Negri, *Riflessioni sul Manifesto per una politica accelerazionista*, 2014, <http://www.euronomade.info/?p=1684>. 以下にも所収。Matteo Pasquinelli, a cura di, *Gli algoritmi del capitale: accelerazionismo, macchine della conoscenza e autonomia del comune*, Verona: ombre corte, 2014, pp. 17-28.

訳注13 〈大都市社会的サンディカリズム〉*sindacalismo sociale metropolitano*、あるいは、社会的サンディカリズムという概念は、主にEuroNomadeコレクティブにおいて議論されてきたものであるが、およそ新自由主義のガバナンスの一部となった労働組合ではなく、社会運動とともにある労働組合の形成を目指す。また労働組合の闘いは、伝統的な賃金闘争などだけにはもはや限られない。それはヨーロッパを襲う「危機」のなかで、社会的な領域における様々な闘争とそれによって自主管理される制度(住居、診療所、民衆学校、移民の受け入れ)が、相互共生*mutualismo*というかたちで具体的に出現していることに端を発する。生の全体が資本によって包摂される状況においては、生産と再生産、経済闘争と政治闘争などといった区分とその優劣に依拠しない、新たな生の形式とそのような運動が展開されているというわけである。〈大都市社会的サンディカリズム〉においては、その闘争の多数性を互いに翻訳しあう社会的連立と、運動を垂直化する対抗権力の形成もまた課題に据えられている。Alberto de Nicola e Biagio Quattrocchi, a cura di, *Sindacalismo sociale: lotte e invenzioni istituzionali nella crisi europea*, Milano: alfabetta edizioni - Roma:

DeriveApprodi, 2016. ネグリは以下のテキストを書いている。Toni Negri, *Ripensando all'arma dello sciopero*, pp. 69-76.

訳注14 2001年7月20日から22日まで、ジェノヴァでG8が開催された。その前後の時期には、G8に反対するおよそ30万人がジェノヴァの街に集まり、異議申し立てのデモや集会を行った。デモに参加していた23歳のカルロ・ジュリアーニが、警官隊によって射殺された。ちなみに、サミットが妨害されることを恐れたイタリア政府は、ジェノヴァの都市空間に無数の立ち入り禁止区、無数のフェンス、そしておびただしい数の警察を用意し、街を要塞へと改変していた。ジェノヴァの空港も港も閉鎖、最も中心的な鉄道駅への電車の乗り入れもストップされた。ジェノヴァの住民たちは街から出て行くように、店主たちは店を閉めるように促された。「およそ65万人のびとが住む中規模の都市が、およそ一週間にわたって、巨大な監獄へと改変されたのだ」。Agostino Petrillo, *Genova, una settimana meravigliosa*, *DeriveApprodi* 21, 2002, p. 31.

訳注15 アントニオ・ネグリ、マイケル・ハート(長原豊、崎山政毅、酒井隆史訳)『ディオニュソスの労働——国家形態批判』人文書院、2008。オリジナルの英語版は、1994年出版。